

第3部

青森県の青少年の現状と今後

－「青少年の意識に関する調査」（平成30年度）の分析から－

青森県の青少年の現状と今後
－「青少年の意識に関する調査（平成 30 年度）の分析から」－

弘前大学教育学部 教授 田名場 忍

平成 29 年度に策定された第 2 次青森県子ども・若者育成支援推進計画では、第 1 次青森県子ども・若者育成支援推進計画や各種調査結果をふまえ、青森県の未来を切り拓く「子ども・若者」を育むことを基本理念とし、①全ての子ども・若者の健やかな育成、②困難を有する子供・若者やその家族の支援、③子供・若者の成長のための社会環境の整備、④子供・若者の成長を支える担い手の育成、⑤創造的な未来を切り拓く子供・若者の応援という 5 つの重要課題を掲げ、施策・運営を進めている。その効果を検証するには、まだ時期尚早ではあろうが、今回の青少年の意識に関する調査（平成 30 年度）の分析から本県の青少年の現状を確認していくことで、今後重要となる課題を探っていきたい。そして、本書が施策・運営に関わる方々や関係機関の方々は勿論、青少年を支え続けてくださるすべての皆様の良き資料となることを願い、筆を進めたい。

1 青少年をとりまく環境 1-地域への好意度とその理由-

問 2（1）の経年変化結果をみると、最近の平成 24 年度から平成 28 年度にかけては「好き」という回答が 50%を超えていたが、平成 30 年度は 46.3%と減少した。一方、「どちらかといえば嫌い」が、平成 30 年度で 12.1%と他の調査年度に比べて多くなった。また、平成 30 年度学校種別回答結果から、上級学校に進むにしたがって「好き」という回答が減少している点が特徴としてあげられる。「好き」という回答は、小学生で 69.8%、中学生で 45.3%、高校生で 29.5%であった。逆に、否定的回答である「きらい」「どちらかといえばきらい」を合わせた割合は、小学生で 5.3%、中学生で 12.8%、高校生で 23.8%と増加していた。こうした学校種別回答の傾向は、平成 28 年度回答結果と同様でもあり、自身の進路決定時期でもある青年期での青森県への好意度が減少していた。肯定的回答が大半であるとはいえ、こうした好意度の減少結果は、本県への定着促進などといった課題とも関連し、懸念される結果でもある。

そこで、地域への好意の理由を問 2（2）からみると、「住んでいる人が親切・優しいから」、「自然が豊かだから」という選択肢が、選択率が全体で 50%を超え、高い傾向を示した。しかし、学校種別にも着目すると、両選択肢共に上級学校に進むにしたがって減少する傾向があり、選択肢全体でもその傾向が認められた。地域の人々との交流あるいは地域の自然への愛着が減少していくことの割合が大きいことも考えると、青森県への好意度を減少させる要因として、地域の人々との交流と自然への愛着を重視する必要があるかもしれない。一方、自由回答の内容もみると、学校種別に関わら

ず共通に「静か」という記述内容が何度も出されており、また「落ち着く」という記述内容も複数みられた。「静か」という記述に加え「静かで住みやすい」「静かで落ち着く」といった記述から、「静か」ということの記述は、静穏さや安心感といった意味も含んでのものであると推察される。青森県の青少年の好意度を導く要因として、地域の人々とのあたたかい交流を実感でき、犯罪や災害等の危険性が少ないと感じられ、自然豊かで平穏な環境が確保されることが、とりわけ大切であると思われる。

次に、地域の人々とのあたたかい交流という点について、問3の一連の回答について考えたい。(1)の結果では、地域の大人に自分から進んであいさつをすることを「いつもしている」「ときどきしている」との回答は、小学生 88.7%、中学生 82.3%、高校生 70.2%となった。全体的に青少年自ら地域の大人にあいさつをしている傾向にある一方で、上級学校に進むにしたがってあいさつをしなくなっている傾向もうかがえる。(2)の結果から、その理由についても考えてみたい。青少年が地域の大人にあいさつをされているかをたずねた問3(2)では、「いつもされている」「ときどきされている」との回答は、小学生 78.3%、中学生 69.3%、高校生 60.9%となった。上級学校に進むにしたがってあいさつをされていると感じる傾向が少なくなっている点は(1)同様の推移であるが、各学校種別の割合差から、青少年が地域の大人にあいさつをしても大人からのあいさつが返ってこないことがあるのではとも懸念される。平成29年度末策定された第2次青森県子ども・若者育成支援推進計画では、その推進体制として「地域の子ども・若者は、地域で守り育てる」という意識を県民に醸成し、あいさつ・声かけ活動をはじめとした地域活動の推進・拡大を目指し、1年ほどが経過したが、この結果からは、まだ十分な浸透には至っていないことがうかがえ、さらなる推進・拡大と共に、今後も注意深く効果を検討していく必要がある。問4地域活動「あいさつ・声かけ運動」の参加については、経年変化では平成26年度、平成28年度が5~6%程度であったのに対し平成30年度では10.7%と増加しており、特に学校種別では小学生・中学生共に16.4%であるのに対し高校生では2.2%と低い割合となっている。このことから、第2次青森県子ども・若者育成支援推進計画のあいさつ活動は、小中校生に浸透しつつあるが、高校生・大人にはまだこれからといった様子が見られる。今後は、高校生や大人を対象とした啓蒙・啓発活動が望まれる。

2 青少年をとりまく環境2-学校生活・家庭生活、そして友人関係-

多くの小中高生にとって最も重要で身近な環境は、その程度は個々人で異なるにしても学校と家庭、そして友人関係であろう。対人関係に関する発達過程の一般的傾向としては、小学生では家庭を主軸とした幼少期から徐々に学校や友人関係に主軸を移していく時期であり、中学生になるとさらに学校や友人関係に主軸を移しながらも家庭も重要な影響力をもつ時期とされている。ここでは、学校生活・家庭生活・友人関係の順で調査結果を考える。

まず学校生活について、問6(1)結果の経年変化では最近の10年間、「楽しい」「どちらかといえば楽しい」と回答した青少年が9割弱になっていることがわかる。また、学校種別回答から、その割合は小学生94.2%、中学生86.7%、高校生82.3%となり、上級学校に進むにしたがって減少する傾向はあるが、おおむね高い値を示していた。しかし、一方で学校生活を楽しめないと感じた小中高生もあり、そうした青少年の中には、かなり深刻な辛さを感じている者もいる可能性も付記したい。また、学校生活を楽しんでいる理由として、問6(2)結果の経年変化から、選択肢全体が前回調査以前の結果と比較して平成30年度調査結果では、選択肢全体の割合が高くなっていることが指摘できる。最近の青少年の特徴として、以前よりも複数の理由をもとに学校生活を楽しんでいることが考えられる。さらに、学校種別もみると小学生は「授業」も含む比較的多くの選択肢で40%を超える回答であるが、中学生になると40%を超える回答が「部活動」、「友だち」、「学校行事」の三つになり、高校生ではさらに「部活動」、「友だち」と減少していた。「先生」が好きなので学校生活が楽しいとする回答も小学生20.5%、中学生10.9%、高校生12.4%と、学校種別にかかわらず1割を超えたことも付記したい。特に、女子において、男子よりも、「友だち」、「先生」といった人間関係が学校生活の楽しさに影響しているようである。

次に、家庭生活について、問7(1)家族・家庭が安心できる存在・場所かどうかでみると、「安心できる」「まあまあ安心できる」をあわせた割合が、小学生98.1%、中学生93.0%、高校生93.3%と高い値を示した。学校生活での検討同様に、割合は少ないながらも家庭で安心感を得られない青少年にとって、それは深刻で場合によっては緊急性のある問題を抱えている可能性が高くなることも忘れてはならない。問7(2)家族との会話でも、同様に小学生96.8%、中学生93.2%、高校生90.1%が「話をする」と回答している。問7(4)家族・家庭に大切なことについては、「安心できる存在・場所」という選択肢を選んだ割合が、学校種別に小学生37.0%、中学生48.6%、高校生52.3%と上級学校に進むにしたがって高くなっていることが特徴といえよう。家族・家庭に安心感を求める割合が年齢の増すほど高まるこの理由は、今回の調査からは明確にはできないが、高校生の自由記述に「最低でも子どもが20才になるまで夫婦でいてくれること」「ここにいたいと思える場所であること」「金」などとは対照的に、小中学生で「話したり、いっしょにでかける」「善悪の判断をして、怒ってくれること」といった回答があることから考えると、高校生ではより精神的・物質的両面での支えとしての家族・家庭を希求した結果、さらにはそうした希求を生み出す背景にある問題認識の切迫感が、「安心できる存在・場所」という選択につながっているのかもしれない。

最後に、友人関係について、悩みごとの相談相手をたずねた質問13から間接的ではあるが考えてみたい。まず、いろいろなことを相談する相手を一人選んでもらった質問13では、お母さんという回答と友だちという回答が多く、それぞれ全体で36.0%、

27.3%となった。これを学校種別回答でみると、小学生でお母さんへの相談(45.8%)が友だちへの相談(18.1%)よりも多いのに対し、中高生ではお母さんへの相談と友だちへの相談が拮抗してくる(お母さんへの相談と友だちへの相談が、中学生で33.1%と32.1%、高校生で30.6%と30.6%)。この結果から、中学生以上になると、家族と同様に友人が精神的な支えとしても重要な存在になってくることが推察される。また、「誰にも相談しない」という回答も少ないわけではなく、小学生19.1%、中学生21.5%、高校生18.0%と学校種別によらず2割前後となった。質問13(2)から「誰にも相談しない」場合の理由をみると、現状の悩みが相談するほどではない場合(全体で36.6%)や相談せずとも自力解決できる場合(全体で23.3%)などが背景として多いことがわかるが、一方で相談できる他者がいない場合(全体で8.1%)や他者に知られたくない場合(全体で19.8%)なども少なくないことに注意したい。さらに、悩みの相談相手が「インターネットを通じた知り合い」という回答が、少ないながらも存在し(全体で1.8%)、特に高校生女子で4.3%と比較的多くなっていることにも留意したい。自分のことを正直に他者に伝えるという行為は、自分自身を見つめ直す機会、他者からのフィードバックで新たな自分自身の発見を得る機会、そして鬱屈とした気持ちをやわらげる機会にもなる。しかし、それは相談する他者が秘密を守り、誠実に対応してくれることが条件になる。つまり信頼できる他者であることが必要であり、その信頼は日常の他者とのやりとりからゆっくりと育っていくことが多い。その点で、「インターネットを通じた知り合い」の場合、表面的で一時的な信頼感にもとづく危険性や犯罪に知らず知らずに巻き込まれる危険性があることを指摘しておきたい。さらに質問13(2)「誰にも相談しない」場合の理由の結果を詳細に見ると、「相談相手がいらない」という回答が上級学校に進むにしたがって増えていること、「その他」の自由記述では「理解してもらえない」「信用できない」「相手を巻き込みたくない」「周りの人によけいな不安をあたえたくない」「諦め」などの記述があることも指摘しておきたい。こうした回答から、青少年を支える施策のヒントも見えてくる。例えば、自身のことを正直に話せ、さらにそれを誠実に真剣に聞いてもらえる場を通じて、友人や親、地域の大人への信頼感を育て、さらにその信頼関係を背景に相談相手の存在を実感できる日常を育てていくことなどである。

3 青少年の自尊心と感受性、他者への思いやり

自身の存在を肯定的に実感することは、自尊心、自己尊重、自己肯定感などと呼ばれ、学習活動や他者とのやりとりへの意欲や持続性などさまざまな側面に影響があることがわかってきている。また、自尊心は、自身を意識することによって生じ、多くの場合に身近な他者との比較によって吟味されていくものだとも言われている。さらに、自尊心には、自分が自身の長所短所も含めてありのままを肯定的に実感する側面と他者とのやりとりを通して他者に貢献できた経験などから自身の肯定的実感を得て

いく側面とがあるとも言われている。青少年期は、まさに誰もが自分自身について懸命に考え、身近な他者とのやりとりや比較を通じて、悩み、ときに痛みも感じながら、これからの自分を模索していく時期といえる。ここでは、質問8から質問12の回答結果を通して、青少年の自尊心を中心に、自尊心に関連する他者への思いやりや感受性、そして青少年の悩みについても考えてみたい。

まず、自尊心についての「あなたは自分のことが好きですか」とたずねた質問8(1)では、全体で「好き」という回答が16.3%、「どちらかといえば好き」という回答が42.3%、総計で肯定的な回答が58.6%、一方否定的な「どちらかといえばきらい」という回答が28.1%、「きらい」という回答が13.2%であった。平成28年度調査結果と比較すると、「好き」という割合が減少(4.2%減)し、「どちらかといえばきらい」という割合が増加(3.6%増)していた。また、学校種別および性別でみると、肯定的な「好き」および「どちらかといえば好き」という回答が小学生で73.8%(男子78.2%、女子68.9%)、中学生で59.6%(男子66.0%、女子53.2%)、高校生で46.6%(男子52.3%、女子40.0%)と、上級学校に進むにしたがって、そして女子で減少する傾向が認められた。こうした特徴は、一般的特徴でもあり、発達年齢が進むにしたがって、そして女子の方が早く、他者比較も含めさまざまな側面から自身を考え、悩んでいく結果と考えられる。そこで、悩みの種類をたずねた質問12の回答結果ともあわせて考えてみたい。多肢選択方式での回答で、全体の選択割合が多いのは「勉強成績のこと(53.5%)」「将来のこと(42.8%)」「進学のこと(36.0%)」などであった。また、学校種別にみたとき、この3つの選択は、共通して、上級学校に進むにしたがって増えていること(例えば、「勉強成績のこと」では、小学生40.1%、中学生56.1%、高校生61.6%)も特徴である。上級学校に進むにしたがって増加する悩みとしては、他に「家庭、家族のこと(全体で13.6%)」「友だちのこと(全体で20.3%)」「異性のこと(全体で9.9%)」「就職のこと(全体で18.5%)」「性格のこと(全体で20.7%)」「顔や体型のこと(全体で23.9%)」と選択肢全体の半数以上に及んでいた。一方、「悩みごとはない」という選択は小学生32.1%、中学生19.3%、高校生7.7%と減少している。以上の結果から、上級学校に進むにしたがって、抱える悩みの種類も数も増えていることがわかる。また、女子の悩みの特徴的な点としては、「顔や体型のこと」「性格のこと」が学校種にかかわらず男子よりも高いこと、「家庭、家族のこと」や「友だちのこと」では中学生以上で男子よりも高いことなどがあげられる。こうした結果は、自尊心の低下とも密接に関連していると考えられ、また先の相談できる他者の存在とあわせて検討する必要があるだろう。いずれにしても、悩みの種類や数も自尊心に関連して重要な点ではあるが、どのように悩んでいるのか、悩みを分かち合う信頼できる他者はいるのか、悩みの先に見つけていくものは何か、という点も忘れずに青少年一人ひとりと向き合い続けていく必要があるだろう。一点、選択割合は少ないが、深刻な問題のひとつとして「いじめのこと」で悩んでいる児童生徒(全体で2.2%)がいることも

留意点として付記したい。

次に、自尊心の背景となる感受性に関する質問 8 (3)「自然の素晴らしさへの感動」および質問 8 (4)「映画や音楽、美術作品への感動」、さらに自尊心と関連すると考えられる質問 9「自分を大切にしている」、質問 10「他者への思いやり」および質問 11「自分や他者の命の大切さ」について見てみたい。まず、感受性については、質問紙調査での内省回答であることの限界はあろうが、質問 8 (3)「自然の素晴らしさへの感動」においても質問 8 (4)「映画や音楽、美術作品への感動」においても、以前の本県調査結果（平成 26 年と平成 28 年）と比較して、「そう思う」および「ややそう思う」を合わせた割合が増加している。例えば、質問 8 (3)「自然の素晴らしさへの感動」については平成 28 年で 62.4%に対し本年度で 75.2%、質問 8 (4)「映画や音楽、美術作品への感動」については平成 28 年で 74.2%に対し本年度で 82.2%であった。この結果を最近の本県青少年の感受性の高まりと見たとき、その要因は何であろうか。残念ながら本調査では要因を特定する質問は備えていないので推測に過ぎないが、多様な情報機器を日常気軽に使えることで情報接触機会が増加したこと、昨今重視されるようになった道徳教育の効果、経済効果によるレジャー等ゆとり活動の創出等々、多様な視点で今後も考えていく必要がある。しかし、こうした感受性の高まりは、諸刃の剣でもあり、自分自身への厳しい視点となっているのかもしれない。質問 9「自分を大切にしている」、質問 10「他者への思いやり」および質問 11「自分や他者の命の大切さ」では、総じて肯定的回答が減少していた。質問 9「自分を大切にしている」では「している」「どちらかといえばしている」という肯定的回答が平成 28 年で 85.4%に対し本年度で 81.4%、質問 10「他者への思いやり」では「している」「どちらかといえばしている」という肯定的回答が平成 28 年で 95.2%に対し本年度で 93.5%であった。質問 11「自分や他者の命の大切さ」での肯定的回答が平成 28 年で 97.7%に対し本年度で 98.0%と高い水準を維持していることとあわせて考えると、「自分を大切にしている」でも「他者への思いやり」でも高い水準とは言えようが、鋭い感受性が自分自身に向き、自身の至らなさや不十分さに悩み、もがいている青少年の姿も想像できる。また、そういった自己批判的な視点は自尊心の本年度調査の低下にも関連しているように思える。悩むことは、それ自体が悪いことではない。周囲の者達にとって、青少年が真剣に悩んでこそたどり着けるものがあることを大切にし、悩みの先が自傷他害に至らないよう寄りそうことが重要である。

4 青少年の情報機器使用実態とコミュニケーション

インターネットやスマートフォン、タブレット端末等情報機器の普及により、その利便性や有用性ととも犯罪の加害者や被害者になる危険性、ネット依存など情報機器の恒常的な長時間利用による問題が指摘されるようになってきた。本調査においても、平成 20 年度以降、本県青少年の情報機器使用実態とその影響の把握を重視し、注

意を向けてきている。ここでは、特に青少年の情報機器使用実態について経年変化にも着目しながら、あわせて青少年のコミュニケーションについても考えてみたい。

まず、インターネットにつながる自分専用の機器の所有状況（質問 15 (1)）をみると、「持っていない」という回答はごく少数（小学生 4.7%、中学生 2.3%、高校生 0%）であり、所有率の高いスマートフォンでは小学生 23.6%、中学生 49.5%、高校生 95.1%、ゲーム機ではスマートフォンと所有率傾向が逆転し、小学生 78.5%、中学生 70.3%、高校生 56.8%であった。また、タブレット端末では高校生よりも小中学生の所有率が高くなっていた（小中学生共に 40%程度、高校生 22.8%）。一方、携帯電話では小中高中生同程度で 11.7%から 15.3%であった。この結果から、複数の情報機器を所有し、用途に応じて使い分けている青少年の現状が浮かぶ。また、インターネットにつながる情報機器の 1 日の使用時間（質問 15 (4)）については、平成 22 年度から平成 28 年度の調査で増加傾向が認められていたが、本年度は平成 28 年度調査とほぼ同様の結果となった。回答率の多い順に、「1 時間～2 時間未満」で 26.2%、「2 時間～3 時間未満」で 22.1%であった。ネット依存の前段階としての依存傾向の目安として週 20 時間以上の使用をあげている研究もあり、それに該当する回答が高校生では 48.6%（全体で 33.5%）であったことも注意したい点である。さらに、使用目的（質問 15 (2)）をみると、小中高年生ともにゲーム使用が 8 割強と多くなっている。また、中学生では、音楽画像視聴（85.0%）や情報検索（64.2%）、LINE 使用（60.2%）がゲーム使用の他に高い使用率を示している。さらに、高校生では、こうした使用率の傾向が増すことに加え、家族や友だちへの電話やメール、SNS といったコミュニケーションツールとしての使用が加わり、情報機器の多様な使用実態がうかがえる。

こうした情報機器の使用実態は日常生活の基幹にも影響を与えているようで、睡眠や勉強への影響（質問 16 (3)）が「ある」もしくは「ときどきある」とする回答が、小学生で 24.6%、中学生で 50.8%、高校生では 62.5%と、上級学校に進むにしたがって増している。また、フィルタリング機能を知っている（質問 15 (5)）という回答は、高校生 88.7%に対し、中学生（56.0%）、小学生（37.2%）では低いこと、さらにフィルタリング機能を知っている高校生でもその使用状況（質問 15 (6)）は 48.3%にとどまることは、今後フィルタリングについての一層の啓蒙活動の必要性がうかがわせる。さらに、インターネットで知り合った他者とのやりとり（質問 16 (4)）では、小学生 16.1%、中学生 30.9%、高校生 52.1%、全体で 34.9%が経験していると回答した。全体では平成 28 年度とほぼ同傾向であるが、本年度調査で高校生女子が 61.1%と多いことは見逃さないようにしたい。関連して、インターネットで知り合った他者と実際に会うこと（質問 16 (5)）やインターネットで知り合った他者に自身の写真や個人情報を送信すること（質問 16 (6)）については、平成 28 年度調査よりも全体で該当率がわずかに減少している。しかし、ここでも高校生女子の該当率は他に比較して高い（実際に会うことでは 15.6%、写真や個人情報を送信することでは 15.6%）ことは、先の

インターネットで知り合った他者とのやりとりとも関連しているものと思われ、犯罪の被害者となる危険性が懸念される。また、インターネットにつながる情報機器で悪口やいじめにつながる書き込みを「よく見る」「ときどき見る」（質問 16 (2)）とする回答は、小学生 18.2%、中学生 35.6%、高校生 54.0%、全体で 37.8%となった。自分自身がその被害者である場合はもとより、そうでない場合でも、心ない書き込みに辛い思いをしている青少年が少なからずいることにも留意したい。

こうしたインターネットにつながる情報機器でのやりとりは、メールや LINE などの書き込み等文章だけの場合も多いであろうし、それがたとえ画像や動画機能をそなえた電話だとしても、対面でのやりとりとは重要な点が異なってくる。対面でのコミュニケーションの場合、言語としてのメッセージだけでなく、表情や話し方、相手との距離や息づかいや体温、さらには場所や経緯等が大きな影響力をもつ。対面でのコミュニケーションではそうした多様な情報が吟味され、相手である他者の像が描かれていく。一方、インターネットでの他者とのやりとりでは、情報源が限られるために、言語メッセージを中心に、青少年自らの期待にそって他者像を補足し、誤った他者像を創りあげていくことにもなりかねない。こうした危険性は、青少年自らの自尊心を満たしてほしいという期待、誠実な相談相手であってほしいという期待でもあろうことも予測される。質問 14 では、友だちとのコミュニケーションとして楽な方法をたずねているが、回答結果は平成 28 年度調査結果とほぼ同様で、中学生と高校生で SNS や LINE の選択率が高まってはいるものの（共に 25%強）、直接会って話をするという回答が小学生で 78.2%、中学生で 68.3%、高校生で 68.5%と高い割合を示した。こうした結果から、青少年が多様な情報機器に翻弄されつつ使い続けながらも、対面でのあたたかいコミュニケーションに望みを寄せている姿が見えるような気がしてならない。家族や教師、さらには地域の身近な大人も含め、青少年の適切な情報機器使用を導きつつ、日常の対面でのやりとりの中で、悩みもがく青少年の良き相談相手となっていくことこそが、青少年健全育成の重要な課題であり、本県への青少年定着などにも関連する点であると考えらる。